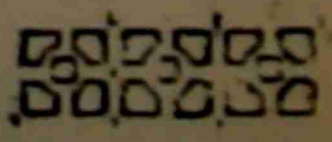


大谷正夫



アンコ気質(かたぎ)万才

「西成のアンコ」「舞町のアンコ」と呼ばれ、また自称する釜の日雇労働者。そのアンコ気質は、「仕事に行っても気がくわなければ、霞のごとく消えるぞ」「飯の二度や三度抜けても、決してケチオチ仕事には行かんぞ」「毎日働かずに食えん俺たちは、お日暮西夕で働くぞ」「一度食ひれた奴等(暴力的な使現像)にや、断じて二度とは行かんぞ」というものだった。またアンコという名には、雇つ創からは侮辱が込められていたが、自身が自称する時は、怒気と斗志が込められていた。

そして、仕事で助けあふ必要、ヤクサ

オ一次暴動前の飯場生活

「ここで、暴動二、三年前のアンコの飯場生活に目を向けることにする。」

俺が、寺田町の〇という飯場に入ったのは、三三年の春であった。その頃の日給、物価の一部は次のようなものだった。

日給——五〇〇円(働いた日は百円貸す)

飯代——一〇〇円(麦飯であり、休めば取分より差引かれる)

酒——二瓶酒(一合)五〇円

チュー——(一合)三五円

煙草——いこい 五〇円

新生 四〇円

電車賃——天王寺⇨大阪 一〇円(履状線はまじナシ)

梅田——一五円(右以外の路線はナシ)

バス——全線一区 一五円

あんパン——一ヶ 一〇円

風呂代——一五円

といつたようなものだった。

飯場の仲間の話では、寺田町近辺の飯場は大部分四五〇円であり、この飯場は麦の混入量も少なく良い方だという。

半月分の勘定を見れば、蓄勤者(労働日数一二日として)で、日々の資金、煙草代の差引残金は、

H00X111 — (100X111 + 100X111 + H00X111)

や手配師の借費から身を守る必要、などからクルースができていった。一部には同じアンコ仲間にも力を入れる、またシノギ、ボツタワリのクルースを雇ったが、いすれにしても、やりたい放題やら、近きねいりさせられてきたことか、三六年の暴動がおこる要因となったと思う。

「二二五〇円である。飯場には、諸式は、煙草、ドスロク(一軒四〇円)のみである。例へば、毎日ドスロク二杯ずつ飲み、二日休んだ者の給料はわずか五〇円である。休むことさえ許されぬ、過酷な労働条件であった。」

寝間の状態は、大部屋(三間のシキリを取り払った一八畳)に、一八人のスシブのである。着替えのある者は少なく、作業で汚れた衣服は壁に掛け、裸でフトンにもぐり込む有様である。出入口の近くは、新入りの間は、足音で目を度度さまし、クッスリ眠ることは困難であった。

日々の生活と仲間意識

日々の生活を見るならば、次のようなものであった。

朝六時起床、味噌汁とつけ物の朝食を立ち食いする。食堂の壁には、分類された名札が掛けである。すなわち今日三人五人と売られるべき者である。弁当を渡され、古い仲間

連れられて行くのである。

この頃は、まだなんでも人力に頼り、ユニボ、フル、生コン等はいうまでもなく、一輪車さえ普及していなかった。従つて、労働の疲労は現在とは比較にならなかつた。

仕事から帰り、百円借りて風呂に行き、帰りにチューを一杯飲んでパーになる者、または、パチンコ屋に、後生大事と百円持って行き、すぐパーとなつてまかぬ顔して帰つて来る者、夜はただ寝るのみである。これの繰り返してあつた。

新入りは、二、三日、警戒の目で見られたり、なんでもない事でハリパをかけられたりする事もあつた。これは、新入りにナメられないための教法であるらしい。また、古い者は非力でもある程度にてる風みはいなものがあつたし、自力達の過去のことは触れたがらなかつた。きつと苦しかつた過去が存在し、忘れられぬことを、忘れようとしているのであろう。

放浪性など片付けてはならぬ社会的矛盾が存在しているからだ。

俺は、三カ月飯場について、当時、時々現金で霞町より来ていたK君から霞町の話を聞き、自由と、より良い生活を求めて、霞町に出る。その頃の奇世象は、飛田を通り入口より南霞町駅近辺であつた。環状線新今宮駅はなく、自動車の少なかつた当時においては、文通の便は地下鉄と阪堺線だつた。故にこの近辺に自然に集まるようになったのである。

はじめの頃は、手配師と一般のアンコの見分けもできず、時には、手配師を親方と見誤つて話しかけようとして、K君等に袖を引いて止められた事もあつたし、親方や仕事を待っているアンコと、一般のアンコとの区別がつかずたろうろろしていて、おれもねK君達の見付け仕事に連れていって貰う。

手配師の顔も覚え——

五、六九月起つと、この秘密も解けた。

四、五日も飯場を暮らせば、仲間達は邪気の無いさつぱりした者が多く、一緒に仕事に行つた場合でも親切であり、弱い者をかばい合う美しい光景も多く見られたし、同じ釜の飯を食つているといふ仲間意識は非常に強かつた。

しかし、他の飯場の者と合同で働く場合、必ず自分の飯場の者と組み、他の飯場の者達が作業上手不定で困つていられる場合でも、相互に助け合ふといふことはなかつた。Eだし、力の優劣は方が必き以上に手伝つて、自分達は何もしなかつたりすることはあつた。

この飯場での生活経歴、霞町での仕事仲間カルーアとの生活経歴は、仲間意識と結束といふ生長的な面と共に、カルーア優先というセクト的なものを生んだ。

自由を求めて霞町へ

飯場の者は定勤が激しく、三分の二程を残して勘定廻に入れ替つた。これは、労働者の多く知つていたわけである。

手配師は朋友会であり、釜にいた租買の数は二十名程度だつたと思う。アンコの数は、正確にはわからないが、千五、六百人だつたろう。一年も常勤おれば、手配師の顔も覚え、ケタ落ち現操も知り、手配師の細にかかるとも少なかつた。

手配師からの仕事は、追若間格に暴力団と關係する現場で、暴力でオドシ追い回すケタ落ちであり、借金も最低の四五〇—五〇〇円止りであつた。手配師共は、仕事へ行付へケタ落ちし、さもなくば他の仕事にも絶対行かぬと囁き、無理に仕事に行かしたり、自主的に仕事に行くのを見付けはじやました。あるいは親方、責任者から手配料として一人当り百円程度巻き上げていた。この被害を受けたのは、新獲の者が多かつた。手配師の押圧の目を見逃れるといふ抵抗は、アンコを

利口にし鍛える癖ではなかった。

ドヤ貸100円、大めし110円

日給、宿、飯屋などのことについては、次のようだった。

日給——手配師の仕事は四五〇〜五〇〇円へ仕事は重労働、自主的な仕事は五〇〇〜七〇〇円へ手配師の仕事より楽、平均五五〇円

宿——木造二階建（高層建築は暴動後に建つ）三層間、二人台部屋、各一〇〇円（普通）、最低宿一ザコ寝、五〇円（銀座通りの横丁にあり）

飯屋——メシ、大・三〇円、中・二〇円、小・一〇円（パサパサの外米飯であるが、量は現在の倍ほどありカキ氷のような盛り方をした）

オカスイ、ケモノ、五円、味噌汁、五円、焼/煮物、一〇〜三

く知っていたからだが、

地方産の思考とは、次元が違っていた。彼等のように、帰れば画々風呂に入り、全部着替えて酒でも飲みながらテレビでも見ておられるとは違う。濡れネズミのため、ドヤは拒否され、古着さ之上から下までを買うことはできず、寒さに震えながらあてもなくさまよつ一夜の恐しさは、言語に絶する苦痛であったのだ。

生活の困窮は、射撃心をそそぎ、安易に出て来るパチンコ屋に行つて、時にはドヤ代シヤリ代までまぎ込んでしまう。しかもヤクザ、サラリーマンの青木族とは、極端に差別され、蔑視され、冷遇され、あるいは面と向かつてアッコちゃんかどうせ百円か二百円貸ければおしまいだ、早く貸けて戻れ率の儲けをあげせられ、それでも百円を五百円四百円にといふへ予定終了五六百個、金額総算四円が多かっただけ、借りたい希望はせつせと足るパチンコ屋に通ひ、生活苦は倍加する。

〇円へ一般に百円品物が多い

他の地域の飯屋、一食——一〇〇円程度
右のことも見ても理解できるように、立ちんぼ（アッコが自分産のことを自嘲的にいう場合の言葉）は、汗水流して働いても、せいぜい日に百円残せれば良い方であった。それ故、作業着、身の品り品等、生活必需品も容易に買えず、破れた衣服の者も決して珍しくはなかった。

啄木は、動けど働けど力が暮し矣にならずといったけど、アッコの暮しは、本能的な飲み食いの欲望ささ忍んで、動けど働けど再々一日降れば元の木阿弥、残るは、消費していく体と着た切り着の破れ衣服のみである。

雨とパチンコと……

アッコは雨が鬼門だった。現像でも少し降り出せばすぐ帰った。この場合は、暴力的働もあまり夜立ちはかった。

アッコなら誰でも雨に濡れた恐しさは、よ

二百円貸ければ翌朝の飯抜き仕事、四百円貸ければ青カン、飯抜き仕事という厳しい現実が現実に行っていた。

「アッコ」と思って馬鹿にするな

現実がいかに厳しくても公平な店員の客扱いなら諦めやすいが、差別の下では怒りがこみあけてくる。「誰の金でも同じやないか、アッコとわかって無償にすんな」とよくいったもんだ。実際、文句を言つても一個の玉も出ないという事は知つていても、差別と生活苦から自然に文句が口をついて出る。

台をたたりたり、文句を言つた者は、待つてましたとばかり店員が容赦なく内部に連れ込み、店に奥食うヤクザビケルズナケル、ケルの最悪を加えて袋へ放り出す。

察や雨り公は、アッコがガラス一枚割つても店の舌げ口を直ぐにパケルが、俺達が暴行されてどんなに傷つこうと知らん顔、パチンコ店では連日連夜アッコに暴力を加えたのに、